



日出晴夫の

「下」な話



日出 晴夫

中小企業診断士。阿南市在住

<http://www.facebook.com/haruo.hinode>

秋の頃です

早いもので、今年も二月になりました。この季節には、ついもの思うことが多いものです。感傷的になることが多いのもこの季節の特徴かも知れません

街を行く人の服装も、モノトーンカラーの基調が多くなり、心持ち前屈みで歩を進めるスタイルが目立つようになりました。来るべき冬の季節を予感させる風情が漂う頃でもあります。

今年は、また、エルニーニョ現象の再来ということで、98年との比較が頻繁になされています。その年も異常気象の連続で、全国で

成人式が大雪に見舞われたという報道がなされたこともありました。さて、今年の冬景色はどのようなものになるのでしょうか？冬將軍の出で立ちは何なものでしょうか？気を揉む日々です。

『熊倉一雄』さん

この稿の作成に取り掛かる直前、一人の人物の訃報に出会いました。また、ひとつの思い出との別れとなりました。数年前、「やなせたかし」さんとの別れの際も、この誌面を借りて哀悼の意を表しました。

人との出会いは楽しいものです。とりわけ、感性的な感化を受けるキャラクターとの出会いは素晴らしいものです。それは思想家であったり、舞台人であったりと局面は様々ではありますが、人生の機微に感じた思ひ出を与えてくれました。しかしながら、齢を重ねるにつれ、出会いというより別れという場面が増えてきます。哀しいことやも知れ

ませんが、これも人生の一部として受け入れて行きたいと思っております。

図①；故熊倉一雄氏



熊倉氏と云えば、昭和31年に劇団「テアトル・エコー」に参加し、以来、半世紀以上にわたり、井上ひさしさんの喜劇などで俳優や演出家として活躍されました。この過程で、私個人の新劇史と重なる訳です。

但し、一般的には、外国映画の吹き替えなど声優の草分け的な存在として知られています。往年のヒットコックの吹き替えについては、軽妙なタッチでありながら、ある種の不気味さ、辛辣さを演じて余りあるものがありません。

また、NHKで放送されていたイギリスの人気ドラマ「名探偵ポワロ」では、

主役のポワロの吹き替えを20年以上務められました。NHKの人形劇では「ひょっこりひょうたん島」の海賊・トラヒゲの声も、幼少期の思い出に残っています。また、アニメ「ゲゲゲの鬼太郎」の主題歌も懐かしいところでは。平成22年のNHK紅白歌合戦でもこの主題歌を披露されていたことも懐かしい思い出となりました。

個人的には、何と云っても、昭和の50年に見た「一匹の猫」が印象に残っています。原作は井上ひさし、演出・主演が熊倉一雄というスタイルがお気に入りとなりました。ユーモアたっぷりの舞台進行と、錯綜する劇中劇。最終局面でのどんでん返し。意外性に満ちた展開。そして何よりの面白さとヒューマニズム。全てにおいて心躍る舞台が続いたものでした。

個人的な関わりの世界での氏との最後の舞台と云えるのは、12年1月のテアトルエコーの作品「フレディ」でした。氏は、この舞

台では、監修という役割のようで、実際に舞台に立っていたわけではありません。期待していたわけではありませんが、劇中の一部のナレーションが氏の声でした。あの懐かしく可愛くもある声でした。かつてのヒッチコック劇場」を思い起こしたものでした。それが最後の出会いとなりました。何と、それから二年と九ヶ月を経過しての訃報ということです。

人の生死の境を契機にして、過去を振り返る、そんなことが多くなりました。特に、多感であった若年期に影響を受けた人物であれば猶更です。

学生時代、マルキストという立場に固執しながらも、前途が見えなくなっていた頃、井上ひさし、熊倉一雄のコンビ舞台は、一服の清涼剤となっていました。これで御二人ともに仏籍に入られました。ひとつの時代が終わったようです。合掌。

今度の例会は？

図②：2015年11月例会ポスター



十一月の市民劇場の例会を紹介します(図②)。やや、好事家じみた雰囲気を持った舞台です。主演は、平幹二郎さん、この方も筆者の個人史に残っている俳優の一人です。今は懐かしいテレビドラマ『三匹の侍』。

このドラマの記憶がある方は一定以上の年齢であろうと思います。

五社英雄演出によるリアルな殺陣シーン、それまでのチャンバラとは異なっていました。一番、記憶に残っているのは、人を切れば、「シャー」と音がするのです。正にリアルな世界なのです。

二

第308回例会 **松山市民劇場** ★ 088-843-2480
 と き：2015年11月 9日(月) 18時30分
 ところ：ひめぎんホール(県民文化会館)サブホール

た。平氏は虚無的な浪人・桔梗鏡之介役を演じておられました。

王女メディアを男優が？!

図③は、松山市民劇場の、今回の講演ポスターです。やや、細かい記述ですが参照下さい。共演陣も、実力俳優、山口馬木也。演劇実験室天井桟敷の若松武史、

「冬のライオン」で葛藤する役どころを繊細に演じた記憶の新しい三浦浩一。シエイクスピア劇などで存在感のある演技が光る間宮啓行、廣田高志など、充実しています。

新劇というジャンルからすれば、やや、型破りな、それでいて洗練された三十七年ぶりの試みに期待したいと思っております。